

福沢諭吉のハングル普及支援に関する一考察

— 1881年～1895年を中心に —

A Study on the Supply Support of Korean Language of
Fukuzawa Yukichi : From 1881 to 1895

李 垠 松
LEE, EUNSONG

【要旨】 本稿は、福沢諭吉のハングル普及支援の在り方とその意味を明らかにすることを目的とするものである。特に、福沢が強調した俗文主義と社会進化論に基づいた文明論は朝鮮においても、漢諺混用という形でハングルを活用し俗語主義を実践しようとする形であらわれた。本稿では福沢が朝鮮の仮名文字ともいわれているハングルの使用に注目し、1881年に慶應義塾に留学していた朝鮮開化派の兪吉濬にハングルの日常化、すなわち俗文で西洋文化を紹介することを勧めた福沢の朝鮮開化派への支援を探ってみた。特に、「漢城旬報」という韓国初の新聞の誕生から「漢城週報」という初のハングルを使用した新聞の誕生の支援者である、井上角五郎の活躍にも注目した。このような研究を通して、福沢諭吉のハングル普及支援の意図に含まれる俗語主義的文明論者の在り方とリベラルな帝国主義者としての両面性を捉えようとした。

I. はじめに

本稿において福沢諭吉の文明論構築への道を開く鍵として注目したのは社会進化論と俗文主義である¹⁾。福沢は当の日本についてはいうまでもなく、隣国である朝鮮に関しても俗文主義の拡大を希求した。ところで、そのような福沢の俗文主義の拡大論はどのように理解されるべきなのか。さらにこの研究のもう一つの柱である社会進化論とこのような俗文主義とはどのような関係におかれてあるだろうか。本稿では、そのような疑問の具体的な事例として、朝鮮におけるハングル普及問題をめぐってみられる福沢の思想的片鱗を拾いつつ、朝鮮開化派達との関連性は勿論、1883年朝鮮に派遣された弟子達の動きなども通して、ハングル普及支援に関わる福沢の俗文主義のあり方を明らかにしていきたい。

特に、1881年から福沢邸に留まりながら、当時、慶應義塾に留学していた朝鮮開化派の兪吉濬(ユ・ギルチュン)にハングルを日常化し、またそれによって、すなわち俗文で西洋文化を紹介することを勧めた福沢の朝鮮開化派への支援は、いってみれば福沢自身における日本の文明化構築のための試みと並ぶ新しいアジア文明化の構築への試みであったことを明らかにしていきたい²⁾。

福沢の朝鮮関与に関する先行研究は様々な観点からなされ、日本では勿論、韓国やアメリカでも進められてきた。しかし、本稿のタイトルでもある「ハングル普及支援」というキーワードで行われた先行研究は決して多いとはいえない。そこで、本稿においては1880年代の福沢の朝鮮留學生の受け入れや新聞事業支援などに関する資料にふれた研究を参考にしながら、さらに既存の

福沢の文明論に関する数々の研究を加えつつ、当時の史実を探っていく³⁾。すなわち、「ハングル普及支援」というキーワードにみる福沢の俗文主義とその影響について新たな視点を考察したい。それがこの論文のねらいなのである。

II. 福沢諭吉の俗文主義とは

(1) 俗文主義拡大論という文明化戦略

福沢の俗文俗語主義の採用は、直接には若き日に学んだ適塾での師（緒方洪庵）の教訓に由来しており、また「福澤全集緒言」（明治30年）に「自分の文章は最初より世俗と決心し、世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと（中略）ます／＼俗文主義の志を固くしたる」とあるように、明確な形でもって表れている⁴⁾。そうした点を前提にした上で、では、なぜこの俗文主義が福沢の文明化論の主な柱であり、またハングル普及とはどういう関連性を持つのかをまず明確にする必要がある。

福沢の俗文主義と呼ばれた文体は当時としては異例の簡単さでもって有名であったわけだが、福沢自身は、余り学問のない人（山出しの下女）でも誰かが福沢の本を読んでいる声を障子越しに聞いても完全に理解できるくらいわかり易い文章でなければ自分の本意ではないと書くほど徹底した俗文主義者であった⁵⁾。

西洋哲学者の安西敏三はこのような福沢の俗文主義が俗文俗語主義の方法論的自覚からくる翻訳の哲学であるとし、次のように説明している。

福沢は新政府に仕え朝に在って官吏として「上から」文明を凶らんとした他の啓蒙思想家らとの差となって現れてくるのである。さらに俗文俗語主義の採用は、福沢の学問観にも反映される。「人間普通日常に近き実学」を全ての人に勧めることは、俗文俗語主義を採用してはじめて可能である。

閉鎖的になりがちな学者層による学問的営為を俗人にまで推し広めることは、学問的営為主体の解放を意味すると同時に、世俗的事物をも含めた世界事象に対して俗人一人ひとりの自分自身の能力の吟味による合理的判断に従って起きる学問内容の革命をも意味する⁶⁾。

一方、このように新しい学問的営為を目指しながら、西洋科学を大衆化させようとする福沢の俗文主義については、それが日本の文明化または近代化という視点からきたものというよりは、むしろ慶應義塾における起業家としての福沢諭吉の側面であると分析した研究もある⁷⁾。玉置紀夫氏は福沢の丸善の訳書や出版の事業、横浜正金銀行への投資、三菱・高島炭鉱問題への介入などのエピソードから「学者書生流」、すなわち彼の慶應義塾の卒業生に、彼らに相応しい事業の場を与えることを念頭に置いていたと明言している⁸⁾。

私の説は、今の学者読書に耽る勿れ、書に耽るも酒色に耽るも其罪は同じ、唯有眼の人物にして始て読書中に商売を為し商売中に書を読み、学で富み富て学び、学者と金持と同様の

地位を占め、以て天下の人心を一変するを得べきなり⁹⁾。

このように「天下の人心を一変するをえ」るため、福沢は、鋭意執筆した『西洋事情』の売上金を元手に、学習・執筆・出版を繰り返すことによって富を蓄えてきたのだと玉置は主張している。いってみれば、福沢のそのような活動はバートの『政治経済学』の昌頭節において訳出した「人は為すことのある可きの造物」、または『学問のすゝめ・初編』で力説・強調したところの営為だということである。

玉置氏がつけたく「学んで富み富んで学び」という規範⁹⁾は、旧幕府時代の武士社会では想定すらできないものだった。それは、商行為とそれをなりわいとするものを蔑む儒教社会を真っ向から否定するものであったという点を明らかにしている¹⁰⁾。

本稿で用いる福沢の俗文主義とは単なる読みやすい訳文作りではなく、新しい学問である西洋科学を大衆化させる文明化の尖兵であり、そういう学問を身につけた学生たちは各々の職（訳者、記者、銀行員など）でリーダーになり、慶應出身の就職口を広げる。このことは卒業生個人が富みの蓄積に止まらず、彼らがまた文明化の尖兵となって日本の文明化を担っていくことにもつながるのである。

そのような観点は、次の第三章で探る福沢諭吉のハングル普及支援に含まれている様々な希望事項を理解するのに重要な参考になる。

(2) 社会進化論的視野と俗文主義

文明開化期ともいわれる明治初期にさしかかり、J.S ミルやスペンサーの理論が翻訳されると同時に、広く読まれていき、それは社会進化論的観点の拡大を呼んだ。例えば、自由民権論者たちはとくにスペンサーの「社会平権論」を民権運動のテキストと定め、個人の幸福と社会の幸福とを人為的に一致させ、中央集権的傾向を強調したベンダムの功利主義とは徹底的に異なる自由放任主義的な側面を強調した。たとえば、明治政府の権威的な政府機関は徐々に縮小されなければならないという論理は、政治と教育政策を批判する自由民権運動の代表的な論理として掲げられた¹¹⁾。

1870年代、ダーウィンの進化論とスペンサーの社会進化論は日本においては、ヨーロッパのように特別な論争に巻き込まれることなく、J.S ミルの功利主義のような啓蒙主義思想の観点から受容された。しかし、その後、西欧列強の東洋進出が本格的になるにつれ、日本社会においては、自由民権運動系列が強調する国家非干渉主義とはまるで異なる国権論が強調されることとなる。そのさい、国権論の理論的根幹として用いられてきたのが「生存競争」と「優勝劣敗」といった、社会進化論に基づく概念だったのである¹²⁾。

福沢がアメリカのE.S. モース宛てた書簡には、兪吉濬は「西洋文明之事共少しくも、智見を得たる者」として描写されており、その点からするなら、福沢自身と兪吉濬、そしてE.S. モースが社会進化論的な「優勝劣敗の真理」にふれていた点に疑いの余地はない¹³⁾。

そこで重要なところは、この「優勝劣敗の真理」を広く知らせる為に、俗文主義が重要事項になるということである。つまり、易しい俗文によってはじめて旧習を変えることができ、そして

進化し続け、やがて勝ち抜くことができるようになるということである。

福沢は自ら実践してきた俗文主義を通して、日本の文明開化は進んだという自負を持っていたため、旧習を変える一番の方法は「古論を排したるは独り通俗文の力」だと強調するに至った。井上角五郎の『漢城旬報』刊行(1883年)の知らせに対する福沢論吉の意見はこうであった。

其御地新聞新聞紙は第二号まで御送致被下、着々皆可なり。一向一心に御勉強奉祈候。或は材料の為に海外の新聞紙購求の事も緊要ならん、また随て英文翻訳の人物も入用ならん、追々紙面に絵を挿む事も韓人の耳目に新しき工風ならん、或は朝鮮の仮名文字にて近浅なる理学医学の道理を知らせ、又滑稽洒落文なども妙ならん、兎にも角にも仮名は早々御用相成度、漢文のみにては区域狭くして埒明不申、実は仮名文字を以て朝鮮の旧主義を一転致し度なき事共なり。日本にても古論を排したるは独り通俗文の力とも可申、決して等閑に看るべからざるものに御座候¹⁴⁾。

この手紙から、福沢が考える俗文主義を社会進化の力と読み替えて差し支えないだろう。そうした発想の延長線で、日本における仮名文字のように、朝鮮においても朝鮮の仮名文字、即ちハングルの使用を強く勧めていたのである。

Ⅲ. 福沢諭吉とハングル

(1) 兪吉濬の漢諺混用の仮名交り文：国漢文混用文の誕生

金玉均(キム・オッキュン)ら初期開化派は、福沢の影響を受けて、独立や啓蒙、そして富国強兵を目指す内政改革である甲申政変を起こしたことは周知の事実である。福沢は1881年(明治14年)6月、ロンドンに滞在中の小泉信吉、日原昌造の兩人に贈った書簡のなかで兪吉濬について次のように書いている¹⁵⁾。

本月初旬朝鮮人数名日本の事情視察の為渡来、其中壯年二名本塾に入社いたし、二名其先づ拙宅にさし置、やさしく誘導致し遣居候。誠に二十餘年前自分の事を思へば同情相憐むの念なきを得。朝鮮人が外国留学の頭初、本塾も亦外人を入れる、の発端、實に奇偶と可申。右を御縁として朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅へ来訪、其咄を聞けば、他なし、三十年前の日本なり。

また、福沢が当時朝鮮の使節を見て、詠んだ次の詩から彼の思い出の表出をうかがうこともできる。

朝鮮使節渡来

異客相逢君莫驚 今吾自笑故吾情
西遊記得廿年夢 帶劍橫行龍動城(同上)

「廿年」前の事とは1862年(文久2年)、幕府遣欧使節団に随行してヨーロッパへ行ったときのことである¹⁶⁾。この「同情相憐むの念」から、福沢が朝鮮の文明開化を描いていたことは想像に難くない。したがって、福沢は自ら進んで来た俗文主義による開化について、慶應義塾へ留学した兪吉濬に期待を掛けていたことも間違いないだろう。

それでは、朝鮮の開化の扉を開く人材であると期待していた兪吉濬にどのような学習をさせたのか。それを知る手がかりとして鎌田榮吉の「義塾と朝鮮との関係」という演説がある。

私の記憶ではたしか明治十二年の秋と思います。朝鮮人の兪吉濬、尹致昊の二人が、義塾へやって来ました。兪氏は慶應義塾へ入り、尹氏は中村敬宇先生の塾同人社に行つて学びました。所がその最初来ました時は、余程奇異に感ずる事が沢山ありまして、今まで朝鮮人は絵で見て居りましたが、実際を見たのはこれが初めてでありました。此二人は福沢先生の宅へ来まして、私もそこで話をし、物を食つたりしました。その時、今記憶して居りますのは、論語を出して読ませてみましたが、音読では真直ぐに行く、それから朝鮮の言葉で訳をつけさせますと、日本と同じ事で返つては読んでおります。その読んでいく言葉は固より判りませんが、引繰り返つて行く所は、日本の読み方と違ひはない、日本と同じ語脈を伝へて居る言葉に違ひないと云う事は判りました。つまりお前の国と日本とは同じ語脈である兄弟の国であると云ふやうなことを言つて話しましたが、その時傍らに間野と云う漢学者が居りまして、「支那人でもやはり真直ぐに行つて意味を取る時は引っくり返へるのだから」と云ひましたので、漢学者はさういう馬鹿なことを云ふから困ると云つて福沢先生から叱られました。兎に角此の間野遺乗は筆談で以て、二人の朝鮮人の監督を致して同居しました¹⁷⁾。

第Ⅱ章で考察したように、文明開化の戦略として俗文主義を広げて来た福沢が、朝鮮においても通俗文の訳文の構成を試みたことは確かである。これは、西洋文明を平明な言葉で訳し、またそれを伝えることの重大さを強調して来た俗文主義の福沢邸ならではの観点だったのであろう。

また、『論語』を読む際、漢文ではなく、ハングル仮名のほうがむしろ語脈が日本語の仮名語脈と通じ合うとして「同じ語脈である兄弟の国である」と表現している。そのような親しみを表す理由については、第Ⅱ章2節で言及したように、朝鮮の文明開化がただ単に文明開化という理想の実現だけでなく、慶應義塾卒業生の立身出世のための、土台作りに役立つものとして期待されていたという現実主義的な側面も注目に値する論点だろう。

一方、留学期間中の兪吉濬の学習の様子については『福澤諭吉傳』を参考にすることにしたい。

新聞紙の発行は牛場顧問渡韓の際、先生が其實行を期せられた一事項であつた。先生は予てより朝鮮人の教育上その文章を平易ならしむるため、彼の国の諺文即ち仮名文字を漢字と混用使用することに着眼せられ、兪吉濬が三田の邸に寄寓して居たとき、兪に命じて「文字の教」の文章を漢諺混用の仮名交り文に訳せしめ、文章はこれでなければならぬといつていられた¹⁸⁾。

「文字の教」の文章を漢文とハングルとを混用して新たな文章作りに挑戦したことがわかる。

そのように、ハングルと漢字を合わせて使う文章作りは朝鮮において後に国漢文混用文と呼ばれることになる¹⁹⁾。この国漢文混用を使って、兪吉濬の『西遊見聞』が出版されたのは1895年のことであるが、彼はそれに先立つ1883年、韓国最初の近代式外務省である統理交渉通商事務衙門の主事に任命された。彼は新聞の発刊に力を入れながら、多数の国漢文混用の文書を残している。

そのような状況から、兪吉濬は慶應義塾へ留学した際、福沢のもとで漢諺混用の仮名交り文を練習しつづけたのだが、作り出した漢諺混用文は後日、朝鮮で「国漢文混用文」と言われる文体となったのである²¹⁾。少なくとも、1880年代から1895年代までの試みからするなら、兪吉濬の著作や『漢城周報』などに使われた初期の国漢文混用文は福沢の俗文主義から生まれたものといわれて過言ではないだろう。

(2) 朝鮮における新聞発行活動支援

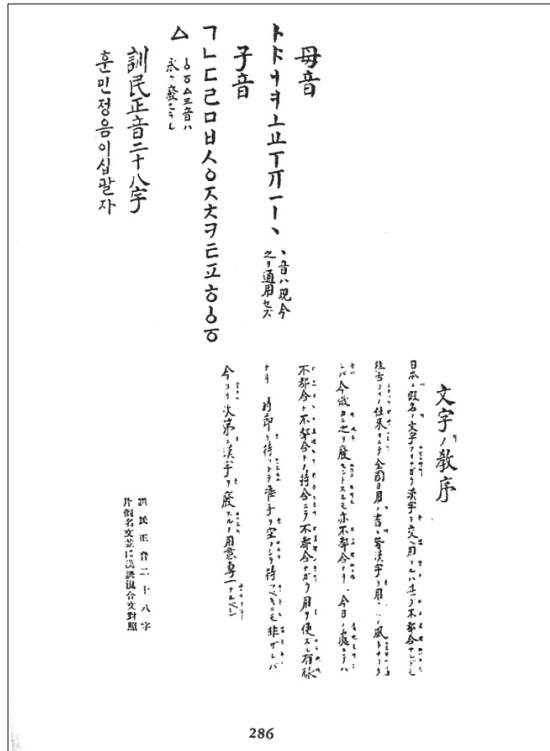
兪吉濬は1882年12月頃牛場卓藏、井上角五郎、高橋正信の三氏と共に帰国した。この兪吉濬の帰国は、新聞発行の実務を彼に任せようとした朴泳孝の計らいによるものだった。朝鮮における新聞発行は、福沢諭吉が留学生派遣と共に朝鮮の文明化の一環として推し進めた主要事業の一つだったのである。

福沢は朴泳孝一行の帰国にあわせ、朝鮮に牛場卓藏、井上角五郎、高橋正信らを行かせるのだが、そのさい彼ら3人には次の言葉を送っている。

君も亦朝鮮国に在て全く私心を去り、猥に彼の盛事に喙を容れず、猥に彼の習慣を壊るを求めずして、唯一貴の目的は君の平生学び得たる洋学の旨を伝え、彼の上流の士人をして自ら發明せしむるに在るのみ。自身既に發明するときは、政事の変革、風俗の改良の如きは誠に易々たるねりにして、学者たる君に於ては之を傍観して可なり²²⁾。

さらに『井上角五郎先生伝』には、より詳しい状況が記されている。

福沢翁は豫て金玉均等に世界の形勢を説いて自覚を促していたが、この時、実行問題として一行に勧めた事は、第一は朝鮮から青年を多く日本に留年させる事であり、第二は京城で新聞紙を発行する事であった。留学生については先年朴定陽（パク・ジョンヤン）氏が来訪

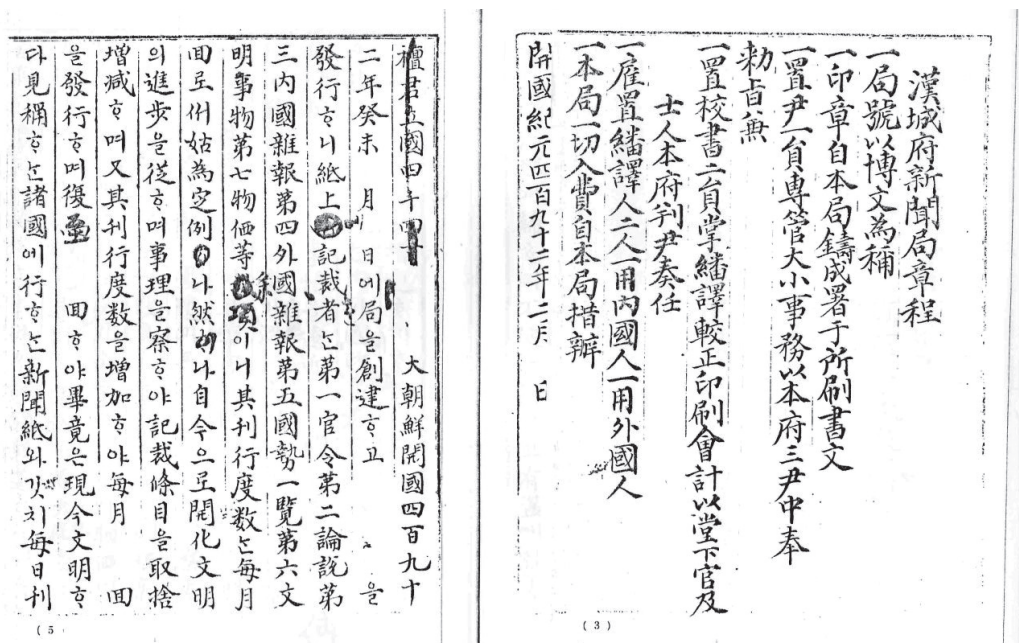


< 図 1 > 訓民正音 28 字と漢諺混合文対照²⁰⁾

した時に進めた事で、その為に来たものが兪吉濬等二三名であったが、今度の勧めによっては後に徐載弼（ソ・ゼピル）等数十名がこの慶應義塾並びに士官学校に入学したのである。福沢翁は先ずこの二つを実行することを勧めたけれども、一行中にはこの外に軍事訓練も行いたいと望むものがあつた。福沢翁はこの一事については余り賛成しなかつたが、一行の希望によって之も共に実行することとなつた。そこで翁の推薦で牛島卓藏・高橋正信氏は学事について、松尾三代太郎・原田一の両氏は軍事について朝鮮政府に聘せられることとなつて、新聞印刷機械、漢字活字等を準備し、職工監督をも備え入れる。さて、準備万端調つて、牛島氏等の出立も漸く切迫する頃になって、福沢翁は初めて先生を顧み「後藤伯が居られたなら、相談してお前にも行ってもらうのに」²³⁾と言つた。

そのように、福沢は新聞紙の発行に関しては自ら積極的で、準備段階に必要な機械や人材まで用意していたことが分かる。しかし、朝鮮における初新聞紙発行のみちのりは順調ではなかつた。牛島一行と一緒に帰国した朴泳孝は当時漢城判尹（現在のソウル特別市長）として最初『漢城旬報』の発刊の責任者を務める予定だったが、漢城中心部の道路工事で人々から不満の声が上がり、これが原因で廣州留守に左遷された。その後『漢城旬報』の発刊は統理交渉通商事務衙門の博文局に移管された²⁴⁾。『漢城旬報』の責任者となつた金晩植は外国人（長崎駐在イギリス領事アストンおよび駐朝アメリカ公使ウート）の国文使用の勧告にもかかわらず、国文を読むことができないとの理由で国文使用を拒絶した²⁵⁾。

当時、実務的に新聞創刊を具体的に準備していた兪吉濬は、国漢混用文を用いることに意欲を見せていたが、突然朴泳孝が中央政權から放逐されると、彼も官職を辞し、結局、国漢混用文を使用しようとする構想も頓挫した。



〈図2〉 兪吉濬の漢城府新聞局章程²⁶⁾

上記のように、兪吉濬の「漢城府新聞局章程」の発刊辞の準備文章からはまとまった形での初期の国漢混用文の様子は確認できる。しかし、彼の努力にも拘わらず、結果的に朝鮮の初新聞である『漢城旬報』は漢文で発刊されることとなる。

(3) 国漢文新聞の製作 (1886)

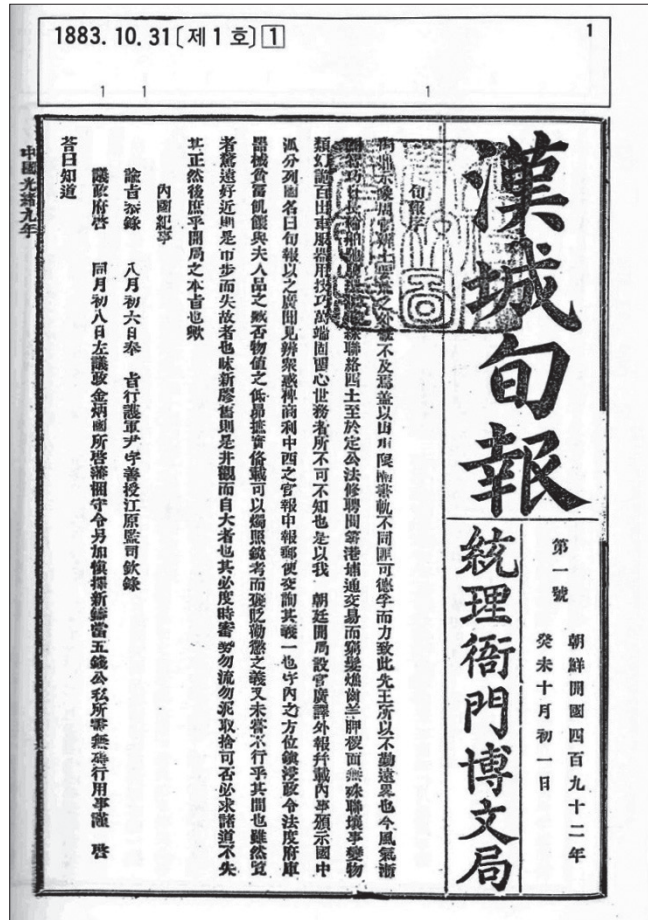
しかし、井上角五郎は姜璋(カン・ウィ)を師として国文を学び、『漢城旬報』創刊号が発刊されたのち、新聞発行の責任者であった金允植も井上角五郎の影響を受け、国漢混用文がきわめて便利な文体であることを理解するようになった²⁸⁾。そして、この国漢混用文は、甲申政変を経た後、1885年12月に新しく発刊された『漢城周報』においてはじめて用いられるようになる。

『博文局は新書籍を刊行し以て民智を啓発せんとして設立したるものなり。癸未十月博文局より発行したる「漢城旬報」は朝鮮に於ける新式報紙の嚆矢なり。その後しばらく中止に帰せしが、乙酉十一月、名を「漢城周報」として続刊するや、井上は金允植と相談して正音と漢文と相混じたる記事を掲げたり。これ我が新聞体の濫觴なり』²⁹⁾

上記の説明通り、井上は、福沢とも面識がある金允植との親交で当時の王妃の甥であった閔泳翊とも交流し、外衙門の顧問にもなった³⁰⁾。井上が金玉均などの急進開化派が亡命した後も金允植らの穏健開化派と良い関係が維持できたのも福沢に対する認識が穏健開化派においても朝鮮の開化のための人物であると理解されていたからであった³¹⁾。

井上が「漢城周報」の刊行後に一時帰国した際、福沢は次のように称賛している。

且其の前後に君が金・朴に厚意を尽くしたのは、両氏とも現に大いに感謝しているところである。加之、君が朝鮮政府の顧問に任じ、殊に朝鮮最初の新聞紙を我が慶應義塾出身者の



< 図 3 > 漢城旬報第一号 (1883) ²⁷⁾

手で起こしたのは、僕が牛場・高橋を選択して推薦した当初の意見を君に依って実現してもらったようにおもっている³²⁾。

井上は、この朝鮮での新聞発行の事業が福沢からの「慶應義塾以外のもの手に成るやうな事」として実現できないことをおそれて、牛場らが帰国した後も、自分は朝鮮に残ったと告白した³³⁾。

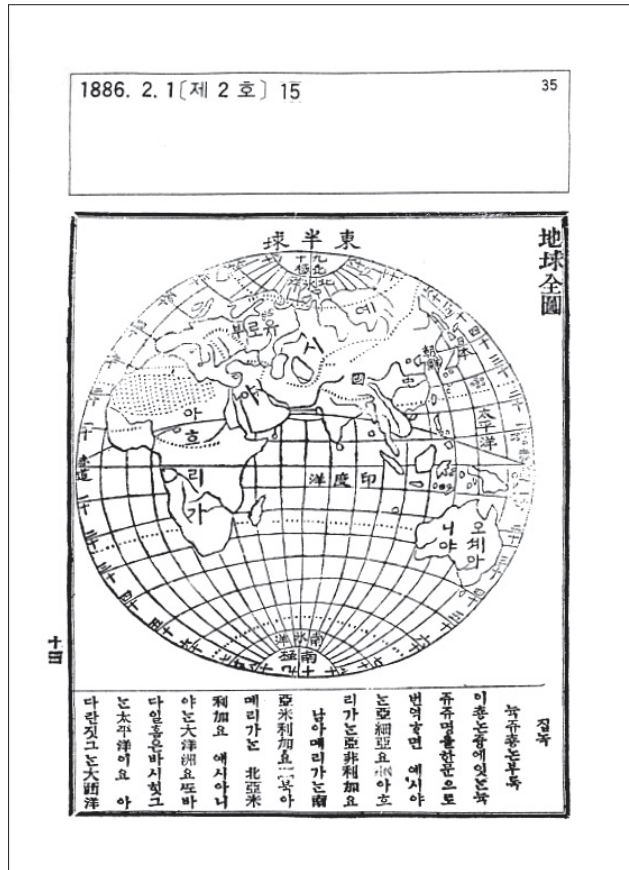
1886年1月25日に創刊された「漢城周報」もまた、福沢のハングル普及支援の一例であった。1884年の甲申政変の時に燃やされた印刷施設の購入の為に帰国した井上に誰よりも早くハングルの新聞製作のため、ハングル印刷字の購入を急ぐよう促したのはほかならぬ福沢だった³⁴⁾。

「漢城周報」の場合、純漢文であった「漢城旬報」とは違い、純漢文・国漢文混用・純ハングルの3パターンの記事が載せられた。というのも、「漢城周報」の純ハングル記事はより広い購読者を対象にしたからである。井上が国漢文混用記事に関して、姜瑋を個人教師として招いたといわれており、その点から純ハングル記事はやはり姜瑋などが参加していたとみるべきではあるが、ただ海外の情報などについては、国漢文混用記事で作成されていることから井上の活躍ぶりが推測できる³⁵⁾。

(4) 『西遊見聞』の刊行

兪吉濬は『西遊見聞』序文のなかで、国漢文(ハングルと漢字の混用)の使用に関して「語意の平順さを取り、文字を少しばかり解する者であつても知りやすくするためであつた」と説明しながら、「我文を純用できないことが不満である」と付け加えている。すなわち、兪吉濬は読者を「上下貴賤婦人孺子」におき、あらゆる階層の人びとに読まれることを願っていたわけで、したがって、分かりやすい国漢文を使用したのであろう。兪吉濬などの開化派は、新しい思想と知識を広げるため、国漢文による言文一致を試みた。

『西遊見聞』は1889年に完成したものの、刊行が遅れ、1895年4月になって東京交詢社から刊行されたが、とりわけ、『西遊見聞』が東京交詢社で刊行されたことは注目に値する。それに加え、この『西遊見聞』の刊行費用に関しては、福沢と関連して様々な見解がある。たとえば、任展憲は兪吉濬が交詢社社員であったことから、福沢諭吉から援助をうけた可能性を指摘している³⁷⁾。



< 図 4 > 漢城周報第二号 (1886)³⁶⁾

西遊見聞序

聖上御極宣は十八年辛巳春御余亦東亞日本御遊を其人民の請願定習俗事
 物の繁殖定景豫令見富引額料を是明かり及に其國中の多聞博學の上達を
 論議唱酬を定際其意退却を立新見富文の書體聞を亦反覆審究を立聞其書
 考を亦實境令送解を叫其界畫披開定則其施措規模の泰西の風俗定者亦十
 八九是居を以蓋日本の歐洲和蘭國其安運通客の二百餘年御遊を亦其扶
 掖斥を亦遊門の關市畫許畫灰画に以爾來歐美諸邦の約畫訂結定後且日交
 外政密令畫隨を可勝機の變改善畫察を亦彼の長技置是取を可現製置是觀客立
 三十年間如斯の其富強令致客を以然則紅毛碧眼の才藝見識の人の遊定者亦必
 有富の余の富の量度定時又引純然定畫種則不止客を以余の此遊の一記の無客
 の不可を亦亦遂乃聞見畫現輯を亦或舊籍の傍考を亦一部の記畫作畫の時
 正午の夏時我亦亦歐美諸國の友約畫許を亦其間の江戸の達を亦余亦其記
 力會用客の願專を亦日余身の泰西諸邦の未至を亦他人の緒餘畫綴拾を亦此記

西遊見聞序

(3)



< 図5> 『西遊見聞』³⁸⁾

IV. 結論：福沢諭吉のハングル普及支援に関する議論

以上の考察から、福沢のハングル普及支援とは、既存の反儒教主義によるアジア文明化の一環としての「朝鮮改造論」や朝鮮政略という側面と、福沢が『学問のすすめ』で強調した「学んで富み富んで学び」という慶應義塾の精神ともいえる、文力（俗文主義）による文明化戦略のあらわれという側面とを併せ持っているものであるといえよう。

事実「脱亜論」以降、福沢の朝鮮論は結果的に朝鮮侵略の試みとして理解される傾向が強い。しかし、福沢とともに「優勝劣敗の真理」を信奉した俞吉濬は1907年に書かれた「光復策」では対日平和信頼関係を前提に日本の指導に従うと韓国も文明国になり、よって日本に奪われた外交権を取り戻すことができると述べている³⁹⁾。

遠くある列強の救援を頼って、近くある隣国を蔑視してはその国が亡びるのでありましょ。亡びるとは、必ずしも亡びを謂うことではありませんけれど、しかしながらその甚だしく危ういことを言って、或いは亡びに至ることもあります。またヨーロッパの人々が言うことを察してみるに、国たるものを云うにあたっては自らを知ることが大事だということであり。自らを知るといことはその国の置かれている所や状況、またそれと隣国との関係について知ることだと言うことでもあります。臣がこの二説を得てから、三十年間これをけし

て忘れた日はありませんでした⁴⁰⁾。

そのような彼の日清韓三国の連帯論や「先実力養成後独立」論は既存の研究において社会進化論に対する批判を含め、その甘い国際観や親日性等が批判の対象となってきた。厳しい植民地統治を経験した世代の研究者であれば、兪吉濬の対日観というのは帝国主義に対する抵抗意識が希薄なものとして見なされたであろう。しかし、新しい観点の研究では兪吉濬の日本観に対する先入観や結果論的な分析をさしあたり止揚し、彼の思想のありのままの実体を捉えようとする傾向も出てきている。すなわち、「当時の日本は、今の我々の観点からは帝国主義者に見えるが、当時の政治家には日本はジレンマではなかったのか。改革のモデルと支援国としての日本と西欧のような帝国主義の侵略者として日本という二重認識のジレンマを持ちながらも、甲午改革のとき開化派に日本は開化の支援勢力として捉えられたのではなかろうか。」という見方である⁴¹⁾。

丸山眞男は脱亜論以前の福沢は「欧米列強の東洋侵略に対する日清韓三国の独立を共に確保させようとした」という主張や「日本及び欧米列強との間の不平等条約を受け容れさせながら、「近代」的な国際関係のもとで朝鮮の独立をはからせようとするもの」という主張した。一方、丸山とは正反対の立場から、安川寿之輔は「福沢は帝国主義的論理を積極的に受け入れて、『文明』の名において日本の『脱亜』を肯定しアジア諸国に対する帝国主義的侵略と併合の道をさしめした」と主張する⁴²⁾。

それでは、福沢のハングル普及支援の目的は何だったのだろうか。朝鮮侵略が目的だったのだろうか。井上君が書いた「福沢先生の朝鮮御経営と現代朝鮮の文化とに就いて」の内容からだと、侵略という言葉より経営という言葉が散見できる。まず、その序文の内容から福沢の俗文主義による朝鮮へのハングル普及支援がどのように紹介されているのかについてみてみたい。

私の父は夙に朝鮮の改革進歩の事に関心して彼国の人智を開き其の文化を進むるには第一に通俗なる仮名文を使用せしむることが必要であるとの考を持つてゐた。往年井上角五郎君が韓国政府に聘せられて新聞紙を発行するとき父が同君に贈つた書翰の中にも、前略、朝鮮の仮名文にて近浅なる理学医学の道理を知らせ又は滑稽洒落文杯も妙ならん兎に角に仮名文は早々御用相成度漢文のみにては区域狭くして埒明不明実は仮名文を以て朝鮮の旧主義を一転いたし度事共なり日本にても古論を排したるは独り通俗文の力も可申決して等閑に看るべからざるものに御座候といふてゐる。井上君は此趣旨を体し種々調査研究の結果、朝鮮の諺文と漢字とを交ふる一種の仮名交じり文を作ることに成功した。現今朝鮮にて用ゐる公私の文体はこれに多少の改良を加へたるものであつて、其教育上文化上に多大の効果を与へてゐる。此一事は亡き父も定めて大いに満足してゐること、思ふ⁴³⁾。(昭和九年一月福沢一太郎)

朝鮮経営という観点は世界文明の立場からの福沢の「朝鮮改良論」とも連携される。福沢はアメリカの武力をとまなう要求によって開国した日本は、文明化して今や文明国になったのだから、朝鮮に武力をもって文明化を迫り、自由貿易を行わせるのは「正理公道」だとする。福沢は1881年以來、日本による朝鮮に対する武力をとまなう文明化を主張した。また、憲法発布と議会開設を経て、条約改正交渉が大詰めを迎えつつある時期に、さらに日本軍の朝鮮出兵という状況にお

いて、福沢は「リベラルな帝国主義者」としての面貌を現すことになる⁴⁴⁾。

甲申政変以前の朝鮮開化派との連携を熱愛とも表現した月脚によれば、福沢の「朝鮮改良論」は文明主義であり、それ自体は朝鮮の併呑に反対するものの、その後、朝鮮に対する態度としては日本の同化主義的植民地支配の原型として位置づけられるものだという⁴⁵⁾。

以上の考察から、福沢のハングル普及支援とは、既存のアジアの文明化の一環としての「朝鮮改造論」や朝鮮政略という側面が、後には同化主義的植民地支配の原型として批判されるものの、しかし、福沢が『学問のすすめ』で強調した「学んで富み富んで学び」という慶應義塾の精神ともいえる、依然とした文力(俗文主義)による文明化戦略のあらわれであるとみて差し支えはないだろう。なぜなら、俗文主義による文明化というのは、いかえると学問(或いは科学)による文明化(或いは進化)であり、そのような意味でこの福沢のハングル支援には、反旧習(反儒教主義)的俗語主義を貫いた実践という意味が込められてあると思われるからである。

注

- 1) 本稿は、拙稿(「兪吉濬の『西遊見聞』における教育論—福沢諭吉との思想的関連を中心として」『日本の教育史学』第47集、2004、そして「兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論的傾向-日本の社会進化論との関連を中心として」『教育学論集』第2集(筑波大学大学院人間総合科学研究科)2006)の後続研究の性格をもつものである。筆者は福沢諭吉(以下福沢)と兪吉濬(ユ・ギルジュン)との思想的関連性を中心に東アジア文明論の構築について研究してきた。
- 2) そうした点を明らかにすることによって、福沢のハングル普及支援が旧文である漢文とその漢文を独占して来た勢力を一掃し、文明社会への進行を日本だけでなく、当時の朝鮮にまで広げて俗文主義に基づいた新しいアジア構築への試みがより明確になる。
- 3) 福沢と朝鮮関連研究は以前の福沢と朝鮮との関連研究を網羅した月脚達彦の研究を参考にした。(月脚達彦『福沢諭吉と朝鮮問題—「朝鮮改造論」の展開と蹉跎』東京大学出版部、2014) 福沢の俗文主義と朝鮮関与を新しい視野で見ることができるのは玉置紀夫の(玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯—学んで富み富んで学び』有斐閣、2002)がある。その他、西欧思想との比較の上で、福澤の文明観を明らかにした安西敏三氏の著書も参考になった。(安西敏三『福沢諭吉と西欧思想—自然法・功利主義・進化論—』名古屋大学出版会 1995) 史実の詳細にはふれるまでもないが、朝鮮の独立を願い、その方便の一つとしてハングル支援計画をたてた人物として福沢諭吉を紹介している桑原三郎の研究も参考にした。(桑原三郎『福沢諭吉の教育観』慶應義塾大学出版部、2000) 他には、福沢諭吉の文明論に関して、アルバートM. クレイグの著書は既存の丸山真男や藤原昭夫などの日本人研究者がおそらく見落としていたとされる福沢が注目したスコットランド啓蒙の発展段階説など、西洋人研究者ならではの視点から説明を加えたものとして興味深い。(アルバートM. クレイグ『文明と啓蒙—初期福沢諭吉の思想』(足立庚・梅津順一訳)慶應義塾出版部、2009)
- 4) 『福澤諭吉全集』(岩波書店1958年(再版本1969年)版本、以下『全集』とする。) 1巻8頁
- 5) 都倉武之「福沢諭吉の文明論—特に地方への眼差し—」全国通信三田会2010年秋期幹事会記念講演要(慶應義塾福沢研究センター) <http://zenkoku2mitakai.pro.tok2.com/kinen101023.html> (2018年9月16日閲覧)
- 6) 安西敏三『福沢諭吉と西欧思想—自然法・功利主義・進化論—』(名古屋大学出版会 1995) 15頁
- 7) 玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯—学んで富み富んで学び』有斐閣、2002
- 8) 同上 171頁
- 9) 『全集』17巻、151-52頁(玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯—学んで富み富んで学び』有斐閣、2002 103頁再引用)
- 10) 同上 101頁
- 11) 社会進化論に関する一般的なまとめは次の論文および書物を参考にした。堀松武一(1978)「わが国における社会進化論および社会有機体説の発展-加藤弘之を中心として-」、『東京学芸大学紀要』第1部門教育科学第29集、16頁、横山寧夫(1967)「加藤弘之と社会的ダーウィニズム」、『社会学論集』第37集、

- 4-5 頁、山下重一『スペンサーと日本近代』、お茶の水書房、1983 62-69 頁。
- 12) 李垠松「兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論的傾向-日本の社会進化論との関連を中心として」『教育学論集』第2集 筑波大学大学院人間総合科学研究科 2006
- 13) Fukuzawa, Yukichi, May 17, 1884, PROPERTY OF PHILLIPS LIBRARY,
『福澤諭吉書簡集』第四卷、岩波書店、2001、171 頁
朝鮮書生兪吉濬も御手許ニ居て御世話相成候よし、此生ハ前年久しく日本ニ而拙宅ニ居り、英語ハ不通なれとも、西洋文明之事共少しくも智見を得たる者ニ御座候。今貴下之御深切を以て、次第二英文をも読慣れて、其学業之進歩するハ小生に於而も悦ぶ所ニ候。
日本教育之義ハ薄々御聞及もありしならん。儒教主義杯申て奇妙なる事を唱へ居り候得共、近日文部省之役人も更迭、又世間之風潮も之を許さず、遂ニは旧之英学ニ立戻る勢なり。亦是優勝劣敗之真理ニ基くもの歎。一笑
- 14) 近藤吉雄編『井上角五郎先生傳』(井上角五郎傳編纂会)大空社、1943 44 頁(以下『井上角五郎先生傳』とする。)
- 15) 石河幹明『福澤諭吉傳』岩波書店、1981 289 頁(以下『福澤諭吉傳』とする。)
- 16) 『福澤諭吉事典』(慶應義塾出版会、2010) 1015 頁
- 17) 鎌田榮吉「義塾と朝鮮との関係」『三田評論』四月号、1918
- 18) 『福澤諭吉傳』三卷、298 頁
- 19) 漢字とハングルとを一緒に使った例は朝鮮時代においても少なくなかった。ただ当時の国漢文混用と呼ばれた文章はおそらく日本の文法を参考にしながら、新しく考案されたものではないだろうか。
- 20) 井上角五郎著「福澤諭吉の朝鮮経営」昭和9(韓国学文献研究所編『政治編7』旧韓末日帝侵略史料叢書Ⅶ、1984 復刻版) 286 頁
- 21) 国漢混用文は、李朝末期のすぐれた漢学者であり、実学的伝統を受け継いだ開化思想家である姜瑋が創案した文体であるとも云われる。(尹建次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会 1982、56 頁)
姜瑋は一八六四年に『擬定国文字母分解』という先駆的著作を完成させている。それは刊行するに至らなかったが、国文の組織、起源等を論じている。(小倉進平、河野六郎補注『増訂補注 朝鮮語学史』、刀江書店、一九六四年、一三八頁(世界言語学名著選集第二期東アジア言語編第5巻、ゆまに書房再出版本参考))
- 22) 「牛場卓蔵君朝鮮に行く」『全集』八巻、496 頁
- 23) 『井上角五郎先生傳』34 頁
- 24) 『漢城旬報・漢城周報 翻訳版』寛勲畧報(倶楽部)信永研究基金 1983 ii 頁
- 25) 尹建次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会 1982 45 頁
- 26) 「新聞刊行에 관한文献」『兪吉濬全集』Ⅳ一潮閣 1971(影印版)
- 27) 『漢城旬報』寛勲畧報(倶楽部)信永研究基金 1983(影印版)
- 28) 『井上角五郎先生傳』99-100 頁
- 29) 『井上角五郎先生傳』102 頁(朝鮮の学者崔南善(チェ・ナムソン)の書いた「朝鮮歴史」第三十九章「博文局」再引用)
- 30) 『井上角五郎先生傳』298-302 頁
- 31) 『井上角五郎先生傳』299 頁・『金允植全集2』(韓国亜細亜文化社 1980) 133-135 頁
- 32) 『井上角五郎先生傳』86 頁
- 33) 『井上角五郎先生傳』38 頁
- 34) 『井上角五郎先生傳』44 頁
- 35) 当時の井上の役割に関しては本人の回顧が載せられている『井上角五郎先生傳』に頼るしかないが、「漢城周報」の国漢文混用記事が書かれた時期と井上の朝鮮滞在時期がほぼ一致することから、彼の活躍を認めざるを得ない。(ハングル論文・和訳)「韓国近代新聞形過程における日本の役割に関する研究」(ソウル大学 1990) 83-84 頁
- 36) 『漢城周報』寛勲畧報(倶楽部)信永研究基金 1983(影印版)
- 37) 任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史—1945年まで』法政大学出版部、1994。41-49 頁、『交詢社百年史』(1983) 182 頁。
- 38) 「西遊見聞」『兪吉濬全集』Ⅰ、1.3 頁
- 39) 「輿福澤諭吉書」『兪吉濬全書』Ⅳ、277 頁

- 40) 「光復策」『兪吉濬全書』Ⅳ、267頁
- 41) 鄭容和(2000)の場合、兪吉濬の日本観、また、日本は当時の知識人には改革のモデルとしての開化の支援勢力として把握されたが、帝国主義的侵略性を知らなかったわけではないと指摘している。(『震檀学報』89、2000、340頁、シンポジウム:『西遊見聞』の総合的検討の討議の答えから)金鳳珍(1996)は1907年以後日本に対する積極的抵抗運動より啓蒙教育活動に献身しながら日本との妥協を唱えたのは帝国主義勢力の日本とではなく、日本の「信義」との妥協であったと理解した。
- 42) 福沢の脱亜論の研究は丸山真男の『福沢論吉選集』第四巻の「解題」、1952、今永清二「福沢論吉脱亜論—近代日本における脱亜の形成についての試論」(『アジア経済』16-8頁、1975)、青木功一「脱亜論の源流—時事新報創刊年に至る福沢論吉のアジア観と欧米」(『新聞研究所年報』(慶応義塾大学新聞研究所)10、1978)、西尾陽太郎「福沢論吉脱亜論成立の周辺」(『西南学院大学文理論集』20、1979)、細野浩二「東洋盟主論の隘路と脱亜論の理路—西欧列強と清朝中国のあいだ」(『社会科学討論』(早稲田大学)27-1、1981)、坂野潤治「解題」(『福沢論吉選集』第七巻、1981)、赤野孝次「福沢論吉の朝鮮文明化論と脱亜論」(『史苑』56-1、1995)、安川寿之輔『福沢論吉のアジア認識』(高文研、2000)、『福沢論吉と丸山真男「丸山論吉」神話を解体する』(高文研、2003)などがある。(註3に最近の研究は紹介している。)
- 43) 井上角五郎著「福澤論吉の朝鮮経営」昭和9(韓国学文献研究所編『政治編7』旧韓末日帝侵略史料叢書Ⅶ、1984復刻版)281
- 44) 月脚達彦『福沢論吉と朝鮮—日清戦争のなかの「脱亜」』講談社、2015、187頁
月脚達彦『福沢論吉と朝鮮問題—「朝鮮改造論」の展開と蹉跌』東京大学出版部、2014、244頁
- 45) 月脚達彦『福沢論吉と朝鮮—日清戦争のなかの「脱亜」』講談社、2015、267頁